

京三中・山城高同窓会 会誌

双々丘



第3号 2010/03/1

目次

巻頭言

白川を歩く

高齢者の自立とモビリティ

「風」「水」「遊」「織」

西陣魚新の由来

日本史やり直し

四十六年間住民の健康見守る

ネパール・エベレスト街道を往く

書道・水墨画に魅せられて

小西通博展

会員からのたより

各期同窓会報告

飛^ひ遜^{とん}

「飛んで姿を消す・俗世間を離れる」

近畿高等学校総合文化祭出品

直径3センチ、鋒の長さ9センチの大筆を使用し、
超濃墨で書きました。

勢いのある作品をめざし沢山練習しました。

二年生 北田 実穂利

言 頭 卷

「全国高校サッカー」優勝五十周年

11回 渡部隆夫

我等が母校「京三中・山城高」は開校以来「文武両道」に亘って誠に優れた学校である。私が在学中の昭和三十三年には全国高校野球、春の大会の甲子園出場を果たし、続いて高校男子バスケットボールで全国優勝、そして明けて三十四年正月の全国高校サッカー選手権では念願の全国優勝を果たした。

近年、サッカーはプロスポーツとして定着し、京都では「京都サンガ」がＪ１リーグで活躍し、全国的にサッカーの話題がビジネスの世界でも多く出る。一昨年のある時、東京の大手銀行の頭取と話している時、その前日の京都サンガの活躍が話題となった。そこですかさず私は「私の出身高校もサッカーが強かったですよ」と水を向け、山城高校だとわかった、その頭取が「私には大変な想い出がある」と言われ、自分は東京教育大学附属高校の時、選手としてその全国大会の準決勝で当校と対戦、「残念乍ら敗れた。しかし今でもその記憶が鮮明に残っている」との事。

数えて見れば昨年がその対戦から五十周年という事になり是非交流会をやり、思い出話に花を咲かせようと約束。昨夏の八月二十二日、東京目黒雅叙園で五十年ぶりの両校メンバーご対面となった。

年月は流れてもお互い全国優勝をかけて臨んだ対戦、自チームや相手選手の一挙手一投足までよく覚えていて大いに席は盛り上がった。青春の若き血を燃やした高校時代、半世紀を経ても今も多くの人々に感動を与えている。

時の流れは五十周年の時の重さを感じる。

白川を歩く

三中三七回 天野光三

哲学の道に沿う疏水は百二十年昔につくられて、北に向かって流れている。その約百米西を並行して流れる白川は何千年、何万年の昔から、全く逆に南に向かって流れている。

その疏水と白川が交差している所がある。銀閣寺道の交差点から百米ほど東に、白川が疏水の下をサイフォンで潜っている。年に数百万人の観光客がその上の「西田橋」を通り過ぎるが、京都の近代町づくりの黎明を告げたその「明治初期の記念物」に気付く人は多分一人も居ないように思う。

東天王町から南禅寺へ南下する白川通は永観堂前を過ぎると右手に白

川が並行する。そのうち動物園の地下に暗渠になって隠れ、疏水に合流して「白川」は消えてしまう。ところが約二百米西で疏水から分水して、なんと白川が「再生する」のである。誰もが知っている平安神宮の大鳥居の足元少し西の疏水べりを注意深く探すとその分水堰を見つけれ

れる。比叡山の南麓に降った雨と、三井寺下から取り込んだ琵琶湖の水が一旦合体していたが、ここで再び疏水から「分身」し、白川となって流れ出す。そのことを示す水面の泡の無心な流れを眺めていると、疏水を作った先覚者田辺朔郎の、英知と勇断の一端を偲ぶことができる。

琵琶湖疏水という当時の大事業に際してこういう形で白川が残されたおかげで、

へかにかくに祇園はこひし、寝るときも枕の下を水の流るる

という有名な吉井勇の短歌も生まれたのである。

金閣・銀閣・清水などの社寺だけではなく、「町づくりの歴史観光」を取り入れられないものか。舟運のために掘られた高瀬川や、インクライン・水路閣、日本初の水力発電所の見学も中学生・高校生の修学旅行に有意義なのではないか。

孫たちの世代にそういう「町づくりの歴史を見る目」を伝えたいが、部活だ塾だ、ゲーム・マンガ……と忙しいようだ。

まだ暫くは元気だが、こちらが歩けなくなる前に実現したい……と云うのは夢だろうか。

高齢者の自立とモビリティ

三中三七回 榎原 胖夫

高齢社会の交通問題を交通の立場からのみ考えるのは十分ではない。高齢社会そのものの特性やそこに住む高齢者たちの行動についての理解がなければ、交通の必要を正しく評価出来ないからである。

すでに指摘されているように、高齢社会では交通需要全体の伸びは大きくない。トンキロ等の単位ではかった高齢者のトリップ量は平均すると少ない。ただ、高齢者は多様な年齢に関係なく、身体能力、気力に大きな差がある。一人で外出できる人、車を運転できる人、階段の昇降に苦痛を感じる人、一人では切符を

買えない人もいる。その結果、求められる交通サービスも多様化し、供給側はその対応を迫られることになる。

高齢社会の特性についていくつか想定できることがある。周知のように、日本の65歳以上の人口は二〇二〇年には全体のほぼ30%に達する。また、高齢者の単独世帯（単身または夫婦のみの世帯）化は急速にすすみ、現在の傾向から推測すると二〇二〇年には70%前後になると二〇二〇年には70%前後になると「スローの冷めない距離」に成人した子供が住む高齢者は甚だ幸運ということになる。

つぎに、高齢になっても健康な人の割合は増える。「前期」高齢者の大部分は、雇ってくれるところがあれば働きたいと考えるか、定職がなくても応分の社会的貢献をしたいと

考えるであろう。悠々自適はやつてみれば退屈なのである。また、社会全体としても増え続ける高齢者からの経済的社会的貢献を活用する方が望ましい。そのための社会的バリアは徐々に低くなると考えられる。

高齢者の経済活動参加率は長期的には低下傾向にあるが、ごく最近では低下傾向に歯止めがかかっているようにみえる。その理由は多様で、さらなる分析が必要であるが、一律的強制的な停年退職制の緩和も理由の一つであろう。そのほか、高齢者のコミュニティ活動、文化活動、芸術活動などの機会を増やす努力も必要である。「アート」の世界に喜びを感じ、そこで創造性を発揮できる高齢者もいるであろうが、そのためにはかなりの時間の投資が必要であり、高齢社会の教育は教育機関の力

リキュラムのなかに「アート」関係の時間がもうけられるべきである。

高齢者の経済行動や交通行動が一般市民と大きく異なると想定することは誤りである。たしかに、高齢者は耐久消費財の購入を躊躇するに違いない。しかし、それは高齢者の経済合理的な躊躇である。高齢者は消費の効用極大化により厳しい。高齢社会の経済政策や交通政策が高齢者の自由な選択を大きく歪めたり、それによって一般的市民により大きな負担を課すことは、更生水準の低下をまねき、出来る限り避けなければならない。

いずれにしろ、高齢者は家にいてテレビでチャンバラを見、外でゲートボールをし、温泉に行きたがるという二十世紀的イメージは消滅し、行動する高齢者がとって代わること

になる。

二〇二〇年頃を考えると、高齢者のなかで運転免許証を保有する人の割合は増える。「団塊の世代」は容易に手放さない。彼らは子供の時から自動車と共に暮らしてきたからである。また、独立して住む高齢者にとって乗用車を失うことは自由を失うことにつながる。

自動車自体も技術進歩がすみ、排ガスが少なく、燃料効率がよく、かつ高齢者の必要に応じた車が開発されよう。したがって、公共交通にとって私的交通はよりきびしい競争相手になるであろう。

二〇二〇年頃、より多くの高齢者が大都市に住んでいるか、中小都市に住んでいるか、または田舎に住んでいるかは推計がなく、想像する以外にない。田舎、特に過疎地に住む

高齢者にとって自家用車は必需品であり続けるであろう。車の運転が出来ない高齢者に対して特別な配慮が必要になる。カープールなどコミュニケーションを中心にした対応が必要になるであろう。一方、都市部では高齢者のモビリティ確保に対する公共交通の役割が大きい。

しかし、高齢者の目線にたつてみると、公共交通の周辺不効用はいかにも大きい。大都市のバス停は行先の異なるバスが多すぎてどれに乗ればよいか、とっさの判断ができない。乗るにも降りるにも時間がかかり、他の乗客に迷惑をかける。鉄道駅では切符を買わなければならないし、その前に運賃を確認する必要がある。機械の前で運賃を先に入れるのか、金額を押すのか迷う。階段を昇ると息切れがするし、エスカレー



「礼に始まり礼に終わる」。我々の学んできたもの、学んでいるものは「剣道」であつて「剣術」ではない。剣道を通じて人と

しての生き方を学ぶという心を忘れてはならない。京三中時代の剣道部の伝統を継承しようとする私は、こゝでも一言居士として現存しているのだろうか。

「おお三中その名ぞ吾等が誇り」



卒業の思い出

—(たった二十九人の卒業)—

三中三八回・山城五回 高林藤樹

上の写真は昭和二十一年三月某日に行われた卒業式の記念写真である。数えてみると卒業する生徒は二十九名で、先生は三十一名である。平成十三年に発行された同窓会名簿には、三中第三十八回生として昭和二十一年・二十二年卒業となつている。戦前、旧制の中学校は五年制であつたが、戦況悪化に伴い四年制に短縮された。そのため三中三十七回生は昭和二十年に四学年修了で五年生と一緒に卒業している。つまり同じ年に二年が卒業したのである。戦後、短縮は廃止となつて五年制が復活

が楽しくて、ずっと続けている。

何と言っても、「見本は、無い！」
「自由に好きなように織れば良い！」
「自分自身を織れば良い」「心模様を
織っていい！」……って「織り」なも
んだからとても、面白くなってし
まった。

フツと振り返ると、「作品展もか
なり数を重ねてきたな」と思う。
見に来て下さった方々との出会いも
楽しく、エネルギー源となる。○九
年は京都三回うち個展(十二月)一
回、会津若松で一回……と作品展に追
われてしまったが、それぞれとても
良い思い出に残るものだった。

BALIの豊かな自然の、鮮やか
な色の中で、織ったり、風に吹か
れながら浮かんだイメージを織った
り、……織りたいイメージはいっぱい、
いっぱい！ワクワクもいっぱい！



これからもつと、ワクワクを見
つけに、ドキドキを探しに、素
敵な風景や、素敵な人たちに会い
に、旅に出よう……そして、出逢った
Somethingを織り続けよう！
「風」に戯れ「水」に遊び、「遊」
を織り「織」で旅する。

西陣魚新の由来

5回 寺田 良子

弊家の先祖は、文化・文政年間、
東山五條大黒町通りで御所御用の酒
造・醤油商美濃屋伊三郎の次男で、
同業同地の角屋新助の養子に入りま
した。江戸後期の弘化年間の方広寺
大仏前各町の一斉退去の令により、
二代目の時、染織の芸術・西陣織の
中心地、西陣の地で安政二年、料理
屋を開業しました。

料理屋に転業するにあたり、おも
てなしの心を常にと、屋号の角屋の
角に心をつけ魚とし、新助の新とで
魚新とのことでございます。

料理の流儀には、四条流、四条園
部流、四条園流、生間流、大草流、
進士流などいろいろの流儀がありま

すが、もとは一つでありそのいずれもが、四条山陰卿を祖としています。各流派の庖丁人は、宮中・幕府・宮家等に明治維新まで仕えたということです。維新後、新しい時代にあたり各庖丁人は職を辞し、町居して請われるままに、料理屋の当主に包丁の作法、儀式の切形、技術の献立、盛り方などの秘伝を相伝され、有職料理屋というものが形成され、当時、宮内省より、このような経過により、当店は、大正・昭和天皇の大礼（即位大饗の宴）、平成二年十二月三日の今上天皇即位の京都御所での茶会、大正期には、東京山王下に支店があり、朝鮮王朝の李王公家、北白川・閑院・伏見・山階等々の宮家の御用を賜り、店名物として煮染した豆腐に若狭ぐじ（甘鯛）を合せ野菜あんを掛けた「今出川豆腐」という

ものがございます。閑院宮載仁親王殿下、ことのほかおぼしめしよく、一度ならず二度、三度おかわりをされたということです。当店では、この料理を「宮様豆腐」といって大切に受け継いでおります。

魚新では、その時季にもっとも豊饒なおいしい素材を使った料理と心がけております。昔から日本料理は天地と一体となって、季の移り変わりをめでてまいりました。はしりに季の味覚を心待ちし、旬にはそれを喜び、名残にはそれを心惜しんできたのです。このようなことを考え、意識的に献立に組み入れ、緊張しながらも、想いを込めるよう努め、ご来店いただいた皆さまに楽しんで頂けるよう心掛けております。御所出入りの店のみ許された麻の白のれんを掛けさせていただく意気と、商標

の鯛の頭にある「鯛の鯛」を向かい合わせた意匠で、そこに老舗の心掛けを、一子相伝の技と味を頑なに守って今日に至っております。

商品としての料理の安全性や信頼性が重視される時代、ブランドとしての魅力は消えないでしょうが、信頼を維持するためには、時代に応じた工夫が常に求められるのです。老舗の看板に寄りかかっているだけではいつか色あせてしまうのです。

当代八代目、京都府知事並びに商工会議所より百年以上続いている「京の老舗」として表彰をうけております。歴史と文化と食というものを合わせてご賞味いただければ幸いです。



創業文化文政年間

日本史やりなおし

14回 川島 寛爾

一九六七年（昭和四十二年）に就職して以来、四十年間をコンピュータに養われてきましたが、二〇〇七年（平成十九年）、無事、定年退職することが出来ました。一つの産業の立ち上がりから成熟に至る時代を渦中にいて過ごすことが出来たのはとても幸せだったと感謝しています。

今は隠居ではなくて日本史の本を読み漁っています。とても面白いです。高校時代の日本史は面白いと云う学科ではなかったし、たぶん私だけが面白くなかったのではないだろうと思います。突っ込んでいけば面白かったはずの場面も結局は受験勉強と云う切り口で暗記科目として付き合う

だけでした。会社生活の一時期の上司で日本の最高学府を出られた方の言葉をしばしば思い出すのです。

「自分は歴史は好きだった。だって覚えれば良い点数が取れるんだもの簡単じゃない。何年たっても変わらないし」と仰っていました。その頃はすでに歴史にはまっていたから「違うんだけどなあ」と思っているが、（なにせサラリーマンでしたから）

一九六〇年代末から一九七〇年代前半にかけての数年間「ここが邪馬台国だ」と云うテーマの本が続々と出版され、どの本も「面白い」と云う評判を取った時代があります。卑弥呼のロマンが高度成長にかかる時期の日本で国の原点を求めさせたのだと思います。論文がそのまま書店に並んだような本もあれば、小説の

形を借りて持論を展開する本も多くありました。並行してスパイ小説がよく売れていた時代です。私は両方の本を楽しく読み漁りました。全くスパイ小説ののりで、邪馬台国にはまり、国内の推理小説を読むのは辞めてしまったほです。

今でもフリーマントル、マイケル・バー・ゾウハー、ジョン・ル・カレなどの本が捨てられもせずにいっぱい抱え込まれたままです。

しかし、私の読み漁りも古田武彦と云う先生の「邪馬台国はなかった」と云う本に出会って以来、手に取る本の傾向がぐっと絞り込まれてしまいました。それは朝日文庫でしたが、文庫本としては厚い方の本で、語り口は全く論文そのものではないかと思っただけです。この方の出版活動は活発で、とてもたくさん本が出

ていますが、論の進め方が小気味よく、色々な疑問を気付かせ、納得させてくれる本ばかりです。テーマは

とても先鋭で「多元王朝史観」と自称する中で日本書紀、古事記、万葉集の解析と論証が中心テーマです。とても刺激的で面白いです。興味の

ある方には次の三冊をお薦めします。①壬申大乱 ②古代史の十字路口―万葉批判― ③邪馬台国はなかった

この順序が読みやすいのではないのでしょうか。この先生はとてもアツクが強い方で九州王朝論者なのですが、日本史専門の学者先生達にはとても評判が悪いのです。それも邪馬台国九州学派からも、邪馬台国大和学派からも嫌われています。ひとえに、論の展開の中で、学会本流が彼の学説を無視することに対してボロクソにこき下ろすことに原因がある

のですが。

先にも述べましたが、この先生のご本はたくさん出版されているのですが、何分読み手が限られているだけにどこの本屋さんにもおいてあると云う具合にゆかないのも面白いところでは。書店に注文するもよし、ネットです。書店に注文するもよし、ネットです。注文するもよし、中古本しか手にはいらないこともありますから、書店で絶版だといわれたらネットを探してみてください。①②はまだ新本でも手に入りますが、③は中古を探して入手することになります。

これらの本を読んで解ることは、一つは古田先生の説の納得性ですが、一つは歴史の世界が音を立てて変わりつつあると言うことです。上に述べた本を探しているとその書棚の近傍に「こんなにかッ!」と思うほどたくさんさんの歴史のテーマの本が

並んでいるのが判ります。

高等学校歴史が面白くなくて「歴史拒否症」になってしまっていた方も少なくないかと思いますが、入試とは縁がなくなった今こそ歴史を楽しまれることをおすすめます。ここでは古田武彦さんを挙げましたが、塩野七生さん(イタリヤ史)もとても面白いですし、世界中が揺り動かされた「国際金融資本家」の歴史も読んで損はないと思うのです。

私たちの年代は明日旅に出るかも知れませんが、まだまだ十年は現世の楽しみを追うことも可能です。本を通じてその楽しみを五千年の昔に遡って楽しむことも可能なのです。歴史を学んで明日に備えると云うしんどいことは現役の人達に任せて、今私は「歴史やりなおし」をひたすら楽しんでいきます。

◆三十三回卒業の四方寿朗氏は
は医業の傍らカメラを愛好され、先
年立派な写真集を刊行されました。
又、九月十二日に京都新聞に記
事が載ったので転載します。

悠然と日本海に注ぐ由良川そばに移
り住み、半世紀が過ぎた。由良ヶ岳の
ふもと、宮津市由良地区の診療所で46
年間、医師を務め、一人で、郷土史の

調査研究や住民運動にも携わり、医師
の仕事を終えた現在も愛着深い地域に
寄り添う。

福知山市で生まれ、由良に移り住ん
だのは1958年。妻の故郷・由良で
義父が地域医療を一人で担っていた。
頼まれるまま、勤務医だった宮津市内
の病院を辞した。

専門は産婦人科で、「由良で生まれ
る7割ぐらいの赤ちゃんの出産に立ち
会ってきた」。



46年間 住民の健康見守る

由良川そばに悠然と移り住み、半世紀が過ぎた。由良ヶ岳のふもと、宮津市由良地区の診療所で46年間、医師を務め、一人で、郷土史の調査研究や住民運動にも携わり、医師の仕事を終えた現在も愛着深い地域に寄り添う。

福知山市で生まれ、由良に移り住んだのは1958年。妻の故郷・由良で義父が地域医療を一人で担っていた。頼まれるまま、勤務医だった宮津市内の病院を辞した。

専門は産婦人科で、「由良で生まれる7割ぐらいの赤ちゃんの出産に立ち会ってきた」。

人手が足りず手術の際は妻に補助を頼むこともあった。急な呼び出しに備え、枕元にはいつも着替えを用意していた。

「金はあるから良かったけど、とてもやりがいがあった」

39歳の時、「よそ者」としては異例の公民館長を任された。しがらみが強く、地元の選挙も「むちゃくちゃな状態」。本当に投票したい人に投票できているか、住民にアンケートを取り、結果を公表した。地元知られぬままKTR（北近畿タンゴ鉄道）由良駅前の桜並木が伐採されそうになった時は、主婦たちと反対の声を上げ、桜を守った。

しかし、保守的な土地柄ゆえに、当時、中学生だった長女の言葉が胸に残る。「お父さんが外で好きなこととせいで、私やお母さんがどれだけ苦労したるか」。驚いたが、家族で暮らす由良だからこそという思いだった。「明日食う米のあるうちは主義は変えん。辛抱せえ」

近所の子と始めた由良ヶ岳登山や、郷土史の研究会は今も続く。「由良はええとこやけど、住めばどこも都。都喜欢なことをしてきただけ」。締まった顔がほころんだ。

（小山愛生）

ふるさと
人
紀行
2009

由良川そばに悠然と移り住み、半世紀が過ぎた。由良ヶ岳のふもと、宮津市由良地区の診療所で46年間、医師を務め、一人で、郷土史の調査研究や住民運動にも携わり、医師の仕事を終えた現在も愛着深い地域に寄り添う。

四方 寿朗さん

郷土に愛着、活動続く

由良川そばに悠然と移り住み、半世紀が過ぎた。由良ヶ岳のふもと、宮津市由良地区の診療所で46年間、医師を務め、一人で、郷土史の調査研究や住民運動にも携わり、医師の仕事を終えた現在も愛着深い地域に寄り添う。

福知山市で生まれ、由良に移り住んだのは1958年。妻の故郷・由良で義父が地域医療を一人で担っていた。頼まれるまま、勤務医だった宮津市内の病院を辞した。

専門は産婦人科で、「由良で生まれる7割ぐらいの赤ちゃんの出産に立ち会ってきた」。

人手が足りず手術の際は妻に補助を頼むこともあった。急な呼び出しに備え、枕元にはいつも着替えを用意していた。

「金はあるから良かったけど、とてもやりがいがあった」

39歳の時、「よそ者」としては異例の公民館長を任された。しがらみが強く、地元の選挙も「むちゃくちゃな状態」。本当に投票したい人に投票できているか、住民にアンケートを取り、結果を公表した。地元知られぬままKTR（北近畿タンゴ鉄道）由良駅前の桜並木が伐採されそうになった時は、主婦たちと反対の声を上げ、桜を守った。

しかし、保守的な土地柄ゆえに、当時、中学生だった長女の言葉が胸に残る。「お父さんが外で好きなこととせいで、私やお母さんがどれだけ苦労したるか」。驚いたが、家族で暮らす由良だからこそという思いだった。「明日食う米のあるうちは主義は変えん。辛抱せえ」

近所の子と始めた由良ヶ岳登山や、郷土史の研究会は今も続く。「由良はええとこやけど、住めばどこも都。都喜欢なことをしてきただけ」。締まった顔がほころんだ。

（小山愛生）

ネパール・エベレスト街道を往く

一八回 中尾四郎

山城高校時代を含め若いころは山登りにはほとんど縁がなく、京都の山を登った記憶は衣笠山か御室八十八力所程度で愛宕山すら足を踏み入れたことはない（嵐山へは何度も行ったが山と言えるかどうか……）。そんな私が五十路を過ぎて中高年ハイキングに興味を持ち始め、富士山を皮切りに北は北海道・利尻岳、南は屋久島・宮之浦岳まで遠征し、「日本百名山」も残すところトムラウシ山一座となった。またリタイア後は「秩父三十四番札所」を徒歩で巡る傍ら、某大学の「山岳宗教と修験道」の講座に通い近畿の屋根「大峯奥駈け道」も三度縦走した。山の魅力は

四季折々の景観と雄大な展望だが、私の場合は「空気の澄んだ山頂での喫煙、下山後の温泉と地酒で反省会」が楽しみの一つである。幸い火山列島のお陰で下山後の温泉も魅力が尽きない。

不純な動機のオッサン山ノボラーだが、一度は世界最高峰のネパール・エベレスト（八、八四八M）をこの目で見たいという思いは尽きなかった。幸いエベレスト街道のナムチェバザール、タンポチエあたりまでなら富士山より僅かに高い標高で高山病だけを注意すれば、私の力量でも可能との判断から某旅行会社のツアーに単独参加した。同街道は登山口のルクラの集落からエベレスト山頂登頂のベースキャンプに近いカラパタール（五、五四五M）間の六

○キロの街道で、田部井淳子やまだ記憶に新しい三浦雄一郎も歩いた道で、ネパール高地民族の生活道路でもある、参加したツアー一行は女性一人を含め初対面同士の五人パーティー。これに山岳ガイド、サード（シェルパ頭）コック、ポーターら七人のスタッフが同行する。

入山初日（十一月八日）は飛行場のあるルクラ（二、八四〇M）を出発、エベレストに來たのにいきなり四〇〇Mの下りから始まる。道中は登山者と同行スタッフ、それに荷役のゾッキョ（牛の交配種）でかなりの通行量。登山客はヨーロッパ系の人々が目立つ。登山道は至る所にゾッキョの糞が落ちており、十一月は乾期でいささか埃っぽいのが難点。荷物はポーターが運び、休憩時

にはシエルパが準備したミルクティーとビスケットで疲れを癒す大名登山。人によつてはシャカリキに高度を稼ぐ国内登山より海外の方が楽だという人もいる。

三日目にエベレスト登頂のキーポイント、ナムチェバザール(三、三四〇M)に到着。翌朝、宿泊ロッジから程近い展望台に登り、世界最高峰のエベレストを初めて仰ぎ見る。雪をまとった「トッポ・オブ・ザ・ワールド」、神々しい頂きに思わず目頭が熱くなる。ヌプツェやローツェ、アマ・ダブラム(通称「女神の首飾り」など六、〇〇〇—八、〇〇〇M級の峰々が一望で、人生を「要領とヨイショ」だけで生きてきたオッサンでも、ここまで来られたのはシエルパやポーターさんの

サポートのお陰と感謝の念が沸いてくる。

四日目にはさらに高みのタンボチエ(三、八六〇M)に踏み入り、そこを基点に喘ぎながら四、〇〇〇



M地点まで登り、お待ち兼ねの紫煙をくゆらせる。酸素が薄いせいで燃えるのが遅く一本がかなり長持ちする。

タンボチエ集落はチベット仏教の立派な修道院もあり、祭礼日には高僧が下から弟子を連れて馬で登るといふ。また近くには日本人が経営する、標高も高いが宿泊費も高い「エベレスト・ビュ」。ホテル」やヒラリー卿が建てた学校もあり、地元の子供たちが世界一過酷な通学路を元気に通う姿を見かける。彼らは登山客に「ナマステ」と笑顔で挨拶を交わすことを忘れない。

帰路は二日かけてルクラまで下山。入山日数七日間(旅行日数は十三日)の山旅だったが、私のネパールの印象が大きく変わった。とりわ

まんだん

けチベット仏教の影響が色濃い山岳地帯は、厳しい自然条件の下、決して豊かではないが厚い信仰心を持ち、日々の労働にいそしむ礼節をわきまえた民という印象を持った。モノは豊かだが「年間三万人の自殺者」を出す日本が忘れ去ってしまった価値観がここにはあるのかもしれない。下山途中に出会った一人の現地女性、体調を崩し二日歩いて病院に行くという。顔色がさえず見るからに辛そうだったが、「ナマステ」の挨拶を精一杯私たちに返してくれたことが心に残る山旅だった。

前ページ写真説明Ⅱ中央左の頂きがエベレスト、右の三角錐はアマ・ダブラム（女神の首飾り）。山腹の道はエベレスト街道Ⅱ十一月十日タンポチエで（人物は筆者）

某甲——学校で「愛国心」を教えようとしているそうだ。

某乙——いいじゃないか。すばらしいことだ。日の丸・君が代・愛国心……と、やつと並んだな。さて、次は何か？

某甲——このような進め方には大いに疑問がある。そもそも現代の若者のなっていないのは教育の順序が間違っている所に根源がある。およそ順序たるもの、孔子のむかしから、修身・齐家・治国・平天下と決まっているのだ。教育は根本より始めて後に末葉に至るのだ。それは幼より起こし、壮に及ぶということである。今の子供は大人を舐めているが、幼いときから長幼の序を知り、親を敬うということが習慣になれば、家庭愛→母校愛→祖国愛と続く。某乙——なにを時代錯誤のようなねぼけたことをいうのだ。そんなカビくさい議論は現代の間尺に合わないぞ。

某甲——いや、そうじゃない。フランスのジャック・アタリー(Jacques Attali)氏は「二十一世紀は博愛主義でなければならぬ」といつている。ねぼけとはどっちのことか。喝！

書道・水墨画に魅せられて

18回 宮澤裕子（旧姓塩見）

京都市立大將軍小学校の五年の時から習字を習い始めました。北野中学校ではテニス部に所属し、毎日遅くまで部活をする日々を送って居りましたので、習字を習う日は走って帰り、習字の道具を持ってまた走って教室へと通いました。教室は妙心寺の塔頭のお寺でした。暗くなると人通りもなく自分の足音だけしか聞こえず、とても心細い気持でした。懸命に走り、教室の明かりが見えた時にホッとしたのを今も鮮明に思い出します。先生がお手本を書きながら、「今日も走って来たんか」と声を掛けてくださいました。正座をして墨をすりながらお手本を見て目でなぞりながら書く準備をしています。

すと、先程までのテニスや走って来た「動」の精神状態から「静」の精神状態へと変化していくのを感じました。そして筆を持ち白い紙面に、墨の黒で字を書いていく事に集中していると、時の経つのも忘れて没頭していった事を思い出します。

高校では箏曲部・華道部に所属して日本の伝統的な文化を学んでおりました。その頃には書道展に出品もしていて、今その時の作品を見ますと拙いながらも若いエネルギーを感じます。同時に、それを書いた時の心理状態が手にとるように浮かんできます。四十数年も経つのに驚きです。

結婚して十年程のブランクの後、書道に復帰しました。この時期には、一から勉強をしようと漢字では王羲之・褚遂良、虞世南、米芾、顔真卿

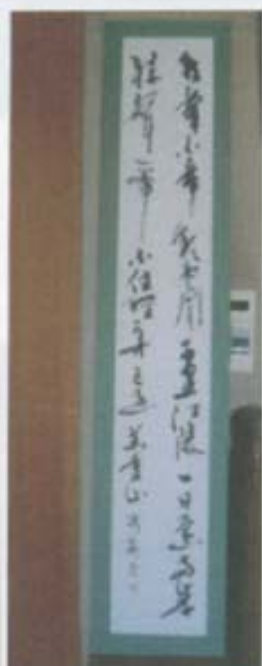
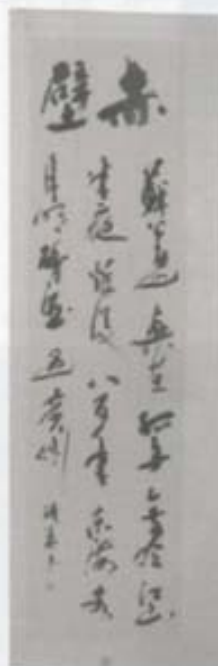
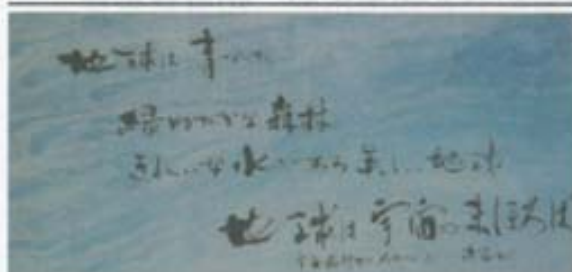
などを、仮名では高野切、関戸本、針切、升色紙などを学びました。現代書も並行して学んでおり、これは近代詩文・歌詞・童謡などを題材に作品製作をします。古典の漢字・仮名に比べると自由さがあって多彩な表現方法で作者の思いを紙面に表現することが出来ます。見てくださの方も書道はやってないけれど、親しみやすく分かり易いと楽しんでくださいます。

また近年、水墨画にも興味を持ち勉強しておりますが、書道と同じ様に和紙・墨・筆を使つて描くのですが、手法・表現方法などの違いがあり新たな芸術性を体験しております。水墨画を始めてからの大きな喜びは、旅行に行った時の思い出深い風景を描き、そこに詩を書き入れて画賛の作品を発表することが出来る

ことです。絵を見るたびに旅の思い出が蘇ってきて楽しいものです。

今は、書道と水墨画の展覧会に年間十四回出品しておりまして、常時創作活動に取り組んでおります。展覧会の一つに、辛酉会書展がありまして、これは日展・読売書展・毎日書展・産経国際書展・水明書道会などに所属されている方々の集まりで、各自が趣深い、個性的な作品を三・四点づつ発表するバラエティに富んだ楽しい展覧会です。同窓生も沢山来てくださいます。学生時代の仲間に作品を見てもらえるのはとても嬉しい事です。今年は、三月十二日(金)から十四日(日)まで京都文化博物館で開催します。今回は三十回記念展になりますので是非お越し頂きたいと思っております。

芸術には終着点がないと言われま



すが、本当に学ぶことが山のようにあります。これからも「継続は力なり」をモットーに楽しく創作活動を続け、見て下さる方に希望・勇気・安らぎ・喜びなどを感じて頂ける様な作品を発表し

たいと思っています。書道・水墨画に興味をお持ちの方、一緒に学びませんか、お待ちしております。
書道・水墨画に興味をお持ちの方、一緒に学びませんか、お待ちしております。

催事名：＜辛酉会書展＞

日時：2010年3月12日(金)～14日(日)

10:00～18:00

場所：京都文化博物館 5F (中京区高倉通三条上る)

26回 小西通博

創画会会員、京都精華大学芸術学部 教授

山城高時代は美術部とワンダーフォーゲル部に所属

京都市立芸術大学日本画科卒業、美術専攻科修了

- 1985年 セントラル美術館日本画大賞展招待出品
- 1987年 京の四季展（京都文化博物館）
- 1990年 現代の屏風絵展（ドイツ・デュッセルドルフ）
- 1992年 いのち賛歌・日本画100人展（京都文化博物館）
- 1993年 文化庁在外研修員としてイタリア フィレンツェに留学
- 1994年 現代京都の日本画展（京都、東京、横浜、大阪高島屋）
- 1995年 美の予感展、京都日本画家協会新鋭選抜展 知事賞受賞
- 2000年 小西通博展 ギャラリーイツ（同01年 第二回展）
- 2003年 創画会展 創画会賞受賞（3度目の受賞により同会会員推挙）
- 2009年 第2回桑土会展（京都高島屋、大阪高島屋）



会員からのたより

4回 福地純一郎

印刷物を作る場合、校正や校閲は最も神経を使う作業である。校正は、寄せられた原稿とゲラ刷りと呼ばれる第一段階の印刷物を比べ、一字一句違いがないように検証する作業で、勿論明らかな誤字や脱字も筆者に連絡のうえ訂正しなければならない。

校閲となると、それに加えて、文章の内容についての適否、言い回しの適否などについても筆者の意見を聞きながら訂正しなければならぬ。何れにしても気を使う作業で、複数の人間で校正、校閲したもので同じ個所を見逃していることがしばしばある。

さて我が「双ヶ丘」も第二号が刊

行されど同慶の至りである。このような時に苦言を呈するのは真に心苦しいが、ひとつだけお許しいただきたい。

本誌九頁上段十七行目「エリート教師が腕を振った」とあるのは明らかに「・・・をふるった」の意味だと思ふが、その場合は送り仮名の「る」が必要で、このままでは「腕を（前後に）振った」の意味にしか読めない。「腕をふるった」は本来「腕を揮った」が正しい漢字で、「振るう」は「士気を振るう」、「台風が猛威を振るう」あるいは「暴力を振るう」などに用いられる漢字である。他に「奮う」という字があるが、これは「勇気を奮う」などで、「揮」は「揮毫（絵や字を書くこと）」、「指揮」などに用いられる漢字である。これが筆者の誤りでも校正者はこ

れを正すのが本来の使命ではないだろうか。

5回 江崎 勤弥

「能」の話と同級生

九月十二日高林さん（五歳兄貴の同級生）が舞う仕舞を見せてもらった。

ことの始まりは四月二十五日の山五会の懇親会にあった。私には名古屋の大学時代の同級生で作っている二金会（メンバー十人）という飲み会があり三十五年続いている。毎年一回は京都へ来て名所旧跡や国宝を鑑賞し、京料理を楽しんできた。今年は三十五回目という事で土曜日一泊で何か特別の企画をしたいとの希望があり、京都出身ということで私に相談された。翌日曜日の予定は、ここ数年強と案内を依頼している掛

川君（同級で京都SKY観光ガイド協会メンバー）に比叡山巡りを頼むことで簡単に決まったが、土曜日の午後名古屋を出て夕食を缺んでの数時間のスケジュールは宿泊場所も含めてメンバーの納得のいく案が見つからずテニス部同級の板倉君に亀岡の湯ノ花温泉の様子を聞いたりしていた。そんな中、今迄は有形文化遺産は見てきたが、無形伝統文化には縁がなかったのに気づき、無形文化遺産第一号の能はどうだろうかとの発想があり、インターネットで検索を試みた。能については全くの素人を対象にした催しは、修学旅行の小中学生や外人相手のものはあるが、時間的に都合の良いものはなく行き詰まっていた。

そんなころに山五会があった。掛川君は修学旅行の案内もやっていた

と聞いていたので情報はないかと訊ねたところ、即座に能の話は高林さんに聴く以外に無いよといわれた。高林さんは喜多流能楽師の家に生まれたが家督は弟さんが継いでいるとは聞いていた。そこで能の話などをお願いできるような人はいないかと尋ねたところ、俺がやってやると即答を得た。

講演予定の四時半より前、約束の東山のある料亭で待つ間もなく、雨模様の四時過ぎ、大きな荷物を抱えた高林さんが到着し、再会の喜びを交わした後、打合せに入った。話だけと思っていったところ、仕舞を二曲舞った後、話をするとのこと、

某甲 大徳寺の塔頭に大仙院という寺がある。

某乙 知ってるよ。枯山水の庭で有名な寺だ。それだけではない、住職の小関老師の説教も面白くて、観光ス



ポットのひとつとして知られている。更に、接待に出る抹茶のお菓子は「梅月」が納めているニッキ芋だ。梅月というのは円町にある和菓子の老舗で、当主の村端豊資氏は三代目でも山城十三回卒業の先輩だ。
某甲—そいつは知らなかった。先輩なら、早速訪ねてみよう。

荷物は仕舞のための衣装と扇であった。宴会場の片隅・八畳ほどのところに金屏風を立てて急ごしらえの能舞台を作る。仕舞は紋付・袴は着けるが地謡方なしで、一人で謡って舞うという（後で人に聞くと極端に簡素化した異例の様式・内容であったようだ）。それと話のために六頁のレジメが用意された。

腹の底からの渋い謡声とともに、能舞の基本姿勢、腰をやや落としすり足で舞う姿はとても八十歳と思えぬものであり、日ごろかなりの稽古をしているか、若いころ陸上競技で鍛えた足腰の強さの賜物かと思われた。

最初の曲は高砂で、私共には婚礼の席で歌われるもの程度の知識しかないが、世阿弥が作り長く親しまれた能で「播州高砂、摂津の国住吉と、国を隔てて住みながらも、夫婦とし

て暮らす老人老女」という人物（松の精）設定で、長寿や老夫婦の睦まじさを讃えたものといわれる。小休止の後、扇を替え、二曲目の熊野（ゆや）を舞って貰う。この曲は平宗盛と愛妾熊野のエピソードを描いたもので、「松風」と並び昔から人々に親しまれ「熊野・松風に米の飯」と言われるほど飽きの来ない面白い能といわれているそうだが、能の莊厳さ以外、まるつきり素人の我々にはその違いすら解らなかった。

彼、高林さんは「能」ではなく、「お能」と叮嚀にいわなくてはならないと言う。それは、江戸時代武家の式楽として、封建制度の下で厚く庇護されてきたからだ。さらに芸能というより、宗教儀礼または拝礼作法のジャンルに入るものだという。「能」は一般的には室町時代に観阿

弥・世阿弥父子が大成したと言われているが、それ以前に遡ると奈良時代の散楽・雅楽・伎楽・田楽等を源流とし、宗教的性格を持ったものであった。さらに遡ると遂に「翁」という曲に行き着く。この「翁」という曲は現行能楽二百数十番の中で、他と構成が全く異なる特異な曲である。奇妙な謡の文句は日本語としてはおよそ理解出来ないものであり、所作や振付は全く拝礼作法そのものである。又、能楽の不思議は音楽の一つでありながら弦楽器を欠くことである。理由はよく判らないが、発生が古いことの証左であると言われている。

この日の熱い講演・仕舞をふくむ語らいは能楽師の家に育った高林さんで無ければ語れない部分を含み、「能楽」についての興味を呼びおこ

す大変なきつかけになりました。この無形文化遺産を現代人が退屈せずに鑑賞でき、ファンを増やし、次に世代に受け継がれていく仕掛けが出来上がることを願うとともに、今回の出会いを高林さんに紙面を借りてお礼 申し上げます。

5回 田崎 央

PPKから「あっけらかん」への急転換

「俺は絶対に、PPK（ピンピンコロリ）やでえ！」と嘯いていた私メなのですが、ファミコンで20年間も殺し続けた、数多くの悪魔の祟りなのか、この約一年間に、普通のヒトは生涯経験しないだろうと思える「重篤疾患手術」を、3つも受けてしまいました。

幸いなことに、いずれも「あっけ

らかん」と済んでしまつて、週4の5回のテニスと、類似頻度の「飲み会」が、懲りなく続く生活です。

最初は「心臓冠動脈閉塞開通」。自然に出来ていたバイパスでは血流不足。造影剤診断と、開鑿＋ステントの2泊3日×2回の入院とも、手術翌日の飲み会もテニスもOK。3級身障者手帳が気になる健康体に戻ってしまいました。

二つ目はイレオストーマ（小腸型人工肛門）着脱2回の手術入院。大腸の最後の所に、訳ありで、魚の骨が突き刺さり、腹膜炎症状を発症したのです。

腹腔内視鏡で、骨の摘出後、上腹部に小腸を引き出してパウチ（袋Ⅱ）を、40日間もつけ、大腸の患部自然治癒のために道路遮断となりました。

某甲——新町通仏光寺下ルに「味禪」という蕎麦屋がある。

某乙——知ってるよ。有名な蕎麦夫婦だ。二人とも山城20回卒業の先輩で、在学中からの蕎麦振りはいよいよ健在だ。更に主人はミュージシャンとしても知られており、店頭には特注の大きなベースが天井を貫いて置いてある。
某甲——そいつは知らなかったな。先輩なら早速訪ねてみよう。

（詳細は「あじせん」で検索）



* * *

大腸と小腸を繋ぎ直して終了したのですが、その間飲み会毎に、皮膚に接着されたパウチが脱落すると言う事故が発生（アルコール溶剤だから当たり前）・・・懐かしい経験とともに完治。

普通なら悲壮感一杯の「胃がん」が、（望むらくは）最後の「あつけらんかん」でした。ガストロカメラ経由で、ガンの周囲に切り目を入れ、そこから刃物で底浚えし患部剥離が最先端医療技術。

インターフェロンも放射線もなしで、一週間目には普通食とテニスに復帰。

再出血は外科的手段やぞ・・・と脅かされ、「一番やばいアルコールを公式には自粛???」

この記事が皆様のお眼にとまる頃

には、「家で飲む日が休肝日」復活間違いなし。

世の中には「ぼつくり寺」は存在しますが、友人の神主と組んで、不測の事態であっても、最先端医療技術を享受できる「あつけらんかん神社」なんてビジネスモデルを創ろうかなあ??

「あつけらんかん」に恵まれ続けた山城五回生 衣笠在 田崎 央

7回 国枝 治郎

高卒50数年、懐かしいお名前のお手紙を頂いた。同窓会誌に何か書くと。昭和30年、高卒後大学に入学すると「山城高卒新入生歓迎会」が開かれており、その後在校生としても数年出席させていたいたときの世話人が確か高林さんだった。

定年退職後仕事や旅行などいろいろ

とやりたいことの計画を立てていたが、退職後間もなくの病気と後遺症で体が不自由になり、全ての計画はだめになった状態なのだが、高校時代は人生にとって大事あることを一言述べてみたい。

大学での勉強は通常生涯にわたる専門の基礎に関わるもので、深くても、その範囲は狭いものであるが、高校のそれは幅広く人生の教養基本にかかわるものである。それだけに友人なども生涯つきあえるような幅広くに出来る。たとえば、高校時代にできた遊ぶためのグループ（二十数名で高校時代に漸進会と名付けた）は屢々各地一泊旅行を含めて関東或いは京都で少なくとも年に一回は会合を持って五十年以上続いてきた。最近メンバーの一人が受章した旭日大綬賞を拝見する会合であつ

た。また、高校三年時のクラス会を

近年まで毎年開いてきた。事情があつてやむを得ず今は休会中であるが、同級生の一人の名古屋大の元総長の話など聞けるのが楽しみである。高校時代の仲間は多方面で仕事をし、いろいろな経験を経ているので話を聞けるのも楽しく、うれしい。

高校は小学区制で小・中学校からの仲間も多く、友人関係では充実して高校生活を送ることが出来た。小学区制は良い制度であつたと思う。

退職をし、無為に日々を送っていると懐かしく思い出されるのは大学時代ではなく、高校時代である。今の歳になると、悔やまれるのは高校時代の不勉強である。もっと幅広く本を読んでおけば良かったと後悔する。時間ができ多くの人達と話していると、自分の基礎教養の不足が残

念でならなく思われる。

十七回卒

17回 堀 正和

下の娘が結婚して、妻と二人の生活に戻った。長女が生まれてこの娘は絶対に手放さないと宣言して回りから笑われたものである。しかし月日とは不思議なもので、娘達の成長と共にうまくした物で、あきらめに似た気持ちが増えてくるものである。もちろん結婚相手の彼を初めて対面する時は多少の抵抗を試みるが無駄であつた。娘達にはこれから幸せである事を願つて毎日常である。

さて夫婦二人だけの生活に戻り、仲良くやっていこうと思うがこれが難しい。すぐに相手を怒らせてしまう。どうも私は氣遣いの出来ない人間らしい。ついつい我が出てしまう。

この欠点を直そうと努力している。ガンバロウ。歳をとったら旅をいっぱいしようと思つていたが、あまり実現できていない、残念である。何とかしなければ……。平均寿命まで後十数年と思うと、これが長いようであり短いようで……。 (まあ考え方次第か)。

これからも色々な事があると思うが、良きパートナーと手を携えて、自分達らしく決して無茶をせず健康で楽しく暮らしていける様に願っています。苦勞をかけますが、これからも宜しく願ひします。

18回 宇多川 隆

吾十有五而志于学 六十而叶願

30数年間の会社生活を終えて、福井県・永平寺にある小さな大学の教員として教壇に立っています。雨の

日も風の日も、夏の暑さにも負けな
いで約2キロの徒歩通学を楽しんで
います。さすがに冬の厳しさには歯
を食いしめる時もありますが、永平
寺の修行僧に比べればたいしたこと
はないと雪道をせつせと歩いていま
す。冬の厳しさがあるがゆえの春の
大きな喜びが北陸にはあります。春
は土筆、夏は水田、そして秋の稲穂。
あぜ道で知る季節の変化に感動を覚
えています。

講義は週に一回。今迄の会社生活
で得た様々な経験の中から面白そう
なバイオの話題を提供しています。
二年目に入り、ようやく慣れてきま
したが、ついつい話が逸れて予定通
りには進みません。毎年入ってくる
学生の中には、キラリと光る物がい
て、それを磨いてやるのが私の勤め
かと考えています。

もともと先生という職業に憧れを
持っていました。それは、小学校
の恩師の印象が強く、一度は恩師と
同じ立場で教育と向かい合いたいと
思っていたからです。六十を過ぎて、
ようやくその願いが叶ったように思
います。

しかし、大学生には思い描いてい
たような個性がありません。皆おと
なしく同じように見えるのです。昔
はもっと覇気があったように思いま
す。受験偏重の高校教育の影響で
しょうか。少なくとも、われらが学
んだ四十年前の山城高等学校には、
一人ひとりに良くも悪くも個性があ
り、正義・真実・責任の命が漲って
いたように思います。

大学にも問題があります。個性が
ないのです。特徴ある大学・教員作
りが今必要ではないかと思っています。

そんな中で活気に満ちた元気な学生
を育てたいという思いで教壇に立つ
ています。

小さな教室の中の何人の学生が、
招来、世界を舞台に活躍してくれる
のか、と楽しみにしつつ声を張り上
げています。君たち、イチローに
なれ！若い学生からエネルギーを
貰いながら、もう暫く教員生活を楽
しみたいと考えています。

ラグビー部

27回 毛利 隆志

暑い8月になると思いだすのが、
昭和47年から49年まで毎年、妙心寺
塔頭、通玄院を宿舍に開催された
ラグビー部の一週間の合宿です。早
朝、起床後は体操とパス練10時から
12時、15時から18時の二部練習、三
中OBの岩内監督、社会人・大学現

役で活躍されていた山城第12回卒の

松山先輩、山城24回卒の竹口先輩はじめ多くの京三中・山城ラグビーOB倶楽部の先輩にも参加いただき実践を想定したアドバイスを受けながらの自分自身にとっては激しい練習でした。家に帰りたい、猛暑、どのの渴き、体力の限界、眠たいといった自分との戦いの中で合宿が終わるとリタイアすることなくやり遂げたという達成感と、どんなことでもやればできるというラグビーを通じて得ることのできた自信が、卒業して35年になりますが、今、生きていく上での財産になっています。

現在は、公認会計士として監査業務、税理士としては税務会計業務、教育分野では、京都産業大学で経営学部・大学院教授として財務会計・公会計・NPO会計等の会計分野の

講義を担当、士（サムライ）業の中でも、多方面にわたる業務分野に恵まれて活動していますが、これも高校時代にラグビーをやめずに続けたという自信と、京三中・山城ラグビーOB倶楽部の先輩・後輩の人間関係の賜物です。日々感謝して、仕事・遊びも含めて、今なお自分の限界へのチャレンジを楽しんでいます。

ラグビーははじめスポーツが強くなれば、生徒も学校も元気が出ますし、我々卒業生も母校を応援しようと元氣になります。人づくり、街づくりの原点だと思います。今は、校舎は建替え工事が完了し、リニューアルされ、素晴らしい環境のキャンパスがあります。この素晴らしい環境を最大限に活用して、勉強だけに止まらずにクラブ活動にも積極的に取り組む後輩が増えることを願っています。

縁

55回 北岡 孝太

京都は排他的な土地・風土だと言われる。そんな京都に密着した仕事をしている私が、最近確信的に感じていることがある。

仕事から日々いろいろな方と出会い、話をさせていただく。大半の方とは初対面で、当初はよそよそしく接しているが、両者が気を許し合う瞬間がある。それは、出身校（地元）が同じであった場合である。

昨年の夏、私は地元にて数万人規模の大きなイベントを行った。関わった関係者の数は数百人以上。私がこれまで担当した仕事の中でも最大級のイベントだった。この仕事を動かしていく中で、幾重にも壁にぶつかった。そんな時、救いの手を差し

出してくれるのは、必ずと言っていいほど、母校もしくは地元の先輩方であった。もし、他のものが担当していたら、会場が別の地域だったら、と言う考えは推測の域を脱しないが、先輩方が、少し最前列に見て下さったと言ったら、主観的すぎるだろうか。

京都は狭い。これからも、各所におられる先輩方を尊重し、大切に、「縁」に感謝しつつ、仕事に励みたい。

各期同窓会報告

◆山五会のいい日いい月の会の幹部会

9月11日(金)(於・西陣魚新)参加者十七名。会長田崎君が病氣入院のため欠席したので、秋田篤君が代理をつとめた。幹部会というものの誰が何のための幹部なのか皆目理



由が見付からない。要は晝から吞んだり食ったり喋ったりがしたいわけである。写真

はその混乱振りをよく表していると思われる。本番は十一月十一日、同じ会場で行われる。

◆洛西三中全会

洛西三中全会というのは、主に洛西に住む三中三十八回の有志の会です。九月十八日、亀岡並河邸にて秋の散策会を行いました。参加十二名。宴会に先立ち、車で愛宕神社と千歳神社をまわり、参拝しました。好天



に恵まれ、黄金の亀岡盆地の稔りを満喫しました。並河君の畑にはリンゴとミカンが栽培さ

れており、「千秋」という品種のリンゴがたわわに実っていました。リンゴとミカンの両方を栽培している

のは全国でも珍しく、おそらく此処だけではないかということでした。

◆京三中・山城高テニスOB会

昨年までは大先輩の西八条實氏（京三中三十一回卒）、同期の松原義明氏（山城八回卒）のご好意により島津製作所・ムラタ機械のコートを使用させていただきましたが、本年度から母校山城高に立派なコートが完成した事でもあり、十月二十五日（日）にOB会を開催しました。

当日は好天に恵まれ、会員相互の交流と親睦を計り部員はOB会員のコーチにより技術指導を行いました。

又部員は顧問にテニス経験豊富な川地先生を迎え本気でテニスに打ち込み好成績をあげつつあり、今後ますますの活躍を期待しています。

ご参加頂いたOB会員に感謝する

と共にテニスは生涯スポーツであり、もっと若年層の参加を望みます。

（幹事 8回 中村長平）

◆山五会いい月いい日の会

十一月十一日（水）於「西陣魚新」にて



◆八八会（三中昭和十八年卒業の有志の会）十一月十五日（於・西陣（魚新）

（新）



◆野本学級会 十二月二十二日（日）



於・上七軒の「岡本紅梅庵」にて。参加者十一名。最も遠来の学友は北海道の狐野美代子さん。

◆ 山城26回卒業生同窓会

会場の全日空ホテルに集った同窓生三十五名、今回は高林先輩に出席頂き、京三中山城高同窓会の意義と



振興についてお話しを頂戴しました。

引き続き先輩から乾杯の発声を戴き、和やかながら賑やかな面々時間の過ぎるのも忘れ二次会三次会へ宴

は続きました。

毎回先生に出席頂いていたのですが、今回初めて高林先輩に来て戴いて、同窓会の重要性和意義を改めて

考えることが出来ました。

今回の同窓会は平成二十三年二月に行う予定です。(松村多美男)

◆ 18回 徳山敏博

ご存じ、元「フオークル」の平沼義男が京都全日空ホテルでリサ



イタルをひらきました。「これが最後のリサイタルや！」が口癖で、もう何度聞かされたことでしょう。それでも、

友情厚い同期の面々が30名近く集まりました。ディナーショー・スタイ

ルのテーブルをいくつか占領したわれわれは、酒が入れば同窓会モードで舞台を背にして話し込み、真面目な？お客さんから顰蹙を買う一場面もありましたが、老いてもなお美声健在な彼と美味しい食事には満足でした。

それにしても、当日にゲスト出演するはずだった加藤和彦氏の計報が1か月後の新聞に掲載されたのには驚きました。

◆ バレー部OG会

今年の山城高校バレー部のOG会が十一月二十七日にありました。メンバーは山城三回から六回までの十数人です。幹事は当番制で今回は五回生、来年は六回生になります。場所は渡月橋と吉兆の中程にあります。「熊彦」で、会費は九千五百円です。あいにく体調不良で二名欠席、出席

者は十四名。一つのボールを追い掛けた高校時代からのつきあいで、毎年一度の再会をしています。「熊彦」は二度目ですが会席料理と眺望が皆さんお気に入りの様子でした。よく食べよく笑い楽しいひとときが過ぎた事に感謝しています。二次会は鮮やかな紅葉の中、亀山公園に足を延ばしました。(5回 明石孝子)

◆三三三十八回同窓会(三八会)

十二月二十九日
(於・「西陣魚新」)



◆山城陸友会

毎月第二木曜日、ミュンヘンにて例会をしています。



◆飲んだ・食った・叫んだ「関東山城組18」新年会

「関東山城組18」(山城18回卒の浜松以東の在住者で構成)の平成22年新年会は1月30日、東京・八重洲の料理屋「膳丸」で催された。初参加2人を含め出席者21人(男性11人、女性10人)と、組員(会員)の半数が参集するという盛況ぶり。

宇多川隆会長の乾杯の音頭で、再

某甲 中筋の浄福寺西入に京料理のお店があるね。

某乙 知ってるよ。「西陣魚新」だろう。安政年間の創業で有職式包丁の老舗なんだ。そして、大女将は山城高校5回の卒業生で女子バスケット部の先輩なんだぞ。更に当主は勲章も貰っているのだ。
某甲—そいつは知らなかった。先輩なら、早速訪ねてみよう。



会を喜びグラスを傾ける。飲むほどに酔うほどに「談論風発」、学生時代がよみがえり懐かしい思い出や近況を語り合う表情は少し赤みも増し若々しい。宴席中央で一人ひとりが近況報告を行う。初参加で単身赴任中の林善夫君は、「家族に異動を伝えると、犬の世話の方が気懸かりだから貴方は単身赴任してください」と「いとも簡単に亭主より飼犬を選ばれてしまった」と笑いながらこぼす。「若さと美貌を保つ秘訣はテニスとフラダンスよ」と自信たっぷりに語るのは「ハマのママ」こと関谷春子さん。民間企業の社長から福井県の大学院に転身した宇多川君は「生身の学生を指導する、人の一生を左右する教育の重要さを改めて認識」と語る。神奈川特産の三浦大根を使った料理が供されると「三

浦半島はマグロに大根と自然の恵みは豊か、ぜひ遊びに来て」と木越英雄君は地元をPR、すると「三浦海岸は私の水泳のフランチャイズ、ご希望なら水着姿も披露しますわよ」と元テニスギヤルで今はシニア・スイマーの大橋文子さんが言ったとか言わないとか。これには写真家の川人忠幸君の表情は「呆れてモノが言えない」といった様子がありあり。「皆さんも年金世代の領域でしょうが、裏方の年金事務を支えているのは私です」とは初参加の鈴木敦子さん。また「60歳を過ぎて宅地建物取引主任の国家試験に挑み、知恵熱にうなされながらも難関を突破した」とはラーメン店から不動産業に商売替えた高橋博道君、「新年会出席のため無理に会津出張を作り、香川・高松市から駆けつけた」のは行動派

学者の穴戸栄徳君。「持ち前の運動神経でソフトボール、バレーボール、遠州名物の風揚げまつりで地元に着し活動している」とは浜松市から来てくれた三谷文夫君、どうやら彼は「意中の人」が不参加だったことが心残りらしい。

多士済々の参加者の話題で全員のメイトルは上がりっ放し。「今宵の主人公は俺だ」「私が女王様よ」と言わんばかりの勢いで、高校時代の慎重深さや気恥ずかしさは一体どこへ行ったのかしらん。賑やかで華やかな宴は時の流れを忘れさせてくれる。今年5月に京都本部が主催する「山城18回卒同窓会」での再会を約束して、ようやくお開きとなった。

コンテスト

紙上フォト



三中36回 長谷川榮一



京三中応援歌その 4

1. 唯に血を盛る瓶ならば
五尺の男児要なきも
高打つ胸の陣太鼓
魂のひびきを伝えつつ
不滅の真理先頭に
進めと鳴るを如何にせん
2. 敵が狂って攻め来れば
いよよ燃え立つ意気の火に
血は逆巻きて溢れ来て
紅蓮の旗は地を掩い
刃向かう者は塵のごと
木っ端みじんと散り失せん



京三中応援歌その 6

1. いでや歌いて共に舞え
ローレラかざしてともに舞え
長空青く暮るる時
雲の巨人もほほえみつ
2. 連山雲に入る夕べ
紅の旗ひらめかし
強き力を讃美せよ
尊き歴史を讃美せよ



京三中応援歌その 8

1. 白馬おどらせ丘に立ち
脚下にひびくオリンピア
緑の林見渡せば
ああ角笛は鳴り響く
2. 昔ギリシャの武夫か
それにも勝る我が勇士
見よ疾風を後にして
流星飛ぶに似たる哉

(京都新聞社の御好意により、平成八年六月に新聞紙上に連載されました「半田動員の記録」を転載させていただきます。)

『防人(さきもり)の詩(うた)』

(一)

昭和十九年十二月七日の早朝――

愛知県知多半島半田地区には、いつもと変わらない淡い朝日が町の軒々を照らし始めていた。師走の声を聞くというのに知多半島での寒気はおだやかな感じを抱かせる日々となっていた。

この地区には中島飛行機製作所の航空機生産工場が置かれ、広大な工場からは高速偵察機「彩雲」と新

鋭の艦上攻撃機「天山」の生産が急がれていた。両機種ともに、その性能から海軍航空隊は「決戦兵器」として強い期待を寄せている新鋭機であった。

中島飛行機の傑作機といえば、既に陸軍航空隊の華とも呼ばれた「隼」戦闘機を第一線に送り出していた。このほかにも陸軍航空隊の重爆撃機「呑龍」も同社の傑作機として実戦配備にしていた。「呑龍」は日本の重爆撃機は日本の重爆として初めて時速五百キロ、航続距離三千キロ、二十ミリ旋回機銃を装備した重爆撃機の登場をみていたのだった。

中島飛行機は、ほかにも陸軍の局地戦闘機「鍾馗」や超高性能戦闘機「疾風」などの新鋭機を続々と製作していた。だが、中島飛行機ではこれら陸軍機ばかりでなく、海軍からの試

作、量産の要請にもこたえるべく同社技術陣は懸命の対応を急いでいた。

そして、海軍側が「航空機こそ主力兵器」の考え方から次々に要請してくる各機種のうち、双発の、高速爆撃機「銀河」を川西航空機との共同設計で量産に移したのをはじめ、さらに夜間戦闘機「月光」の開発と生産にも取り組むなど海軍機の生産にも積極的な協力の方針をみせていた。

このようにして海軍機の量産体制にも移っていた中島飛行機に対して、海軍側はさらに「天山」と「彩雲」の開発を要請してきたのだった。この「天山」は、それまでの間、海軍の艦上攻撃機の主力と目された九七式艦攻の後継機として、また「彩雲」は「いかなる敵戦闘機の追撃も振り切る高速偵察機」との至難な要求が盛られていた。

中島飛行機では、このような要求にこたえて「天山」の性能は雷装後にも最大速度四百六十キロ、航続距離三千三百キロの新鋭艦上攻撃機を開発し、また「彩雲」も乗員三名で六百キロを超える長距離高速偵察機の量産に入っていたのだった。



「航空機が主兵」の戦局となった

この「天山」艦攻と高速偵察機「彩雲」の生産が愛知県半田地区の広大な工場で急がれていた。そして、これらの工場群には「勤労動員」と呼ばれる学徒たちが集団で就労の日々をおくっていた。それらの学校は地元のアヲ知県をはじめ福井県や、さらには遠く鹿児島県からも集団で動員された学徒たちが集められていた。

そして、これらの勤労動員生徒たちのなかに「京都府立京都第三中学校」の名前もみられた。京都三中は三、四、五年生のほとんどが、一部の病弱者を残して、この半田地区の工場へ動員されていたのだった。彼らは、いずれもが京都の自宅をあとにして半田に移り、寄宿舎生活を続けながら連日、汗みどろの生産作業に挺身していた。

この学徒たちが師走の声を聞く

十二月七日の正午、工場内での昼食を終え、再び午後からの取りかかった直後であった。突如、巨大な、しかも異様な振動音が工場全体を包み込むのを感じた。それは、だれもの下腹を突き上げるような衝撃音とともに、工場の立つ大地の地軸が引き裂かれるような振動音でもあった。

「地震だッ」・「大地震だッ」

大声で叫ぶだれもの顔にひきつったような恐怖の色が見られた。次の瞬間、振りあぐ工場の大屋根は激しく波打ち、頭上の電灯は一斉にショートして青白い火花を発していた。その数秒後、巨大な工場の建物はきしみ声をあげながら、彼らの上に落下してきた。

(一)

中島飛行機半田製作所の広大な工

場群を、一瞬のうちに恐慌状態にまき込んだ大地震は、半田地区だけの局地地震ではなく、それは愛知県と三重県の全県域にわたって甚大な被害をもたらしていた。

この地震は「東海地震」ともいわれ、また「三河地震」とも呼ばれていたが、正式な呼称は「東南海地震」と命名され、その規模は震源地の志摩半島沖の太平洋海底でマグニチュード八・〇と記録され、同じ太平洋岸に接した知多半島の半田地区などは強烈な地震となっていた。

現場では、京都三中の動員学徒たちの被害も急きよ、調査が始められた。だが、煉瓦建ての工場の倒壊した瓦礫下に埋められたままの学徒たちの被害の全容を知ることが至難な作業と化していた。

彼ら——京都三中の学徒たちが勤

労働員令に基いて、この愛知県の半田地区に集団で寄宿、就労を始めたのは、五ヶ月前の七月五日のことであった。彼らは愛知県へ出発に先立って、七月三日に母校の校庭で動員出動式を挙行し、翌々五日に京都を出発していた。

この出発前のあわただしい状況をめぐって、同中学の四年生有志編集の文集「学徒勤労働員の記録・紅の血は燃ゆる」は——

「六月二十四日（土・晴）朝会にて校長先生より動員について重大発表あり。昨日、動員令書が交付され、わが京三中は3年生以上、愛知県半田地区の中島飛行機工場へ出動することに決定。一・二年生は残留と決まった。かねて覚悟はしていたものの今更ながら遠くへ行かねばならぬことに驚く。しかし、直接戦力の

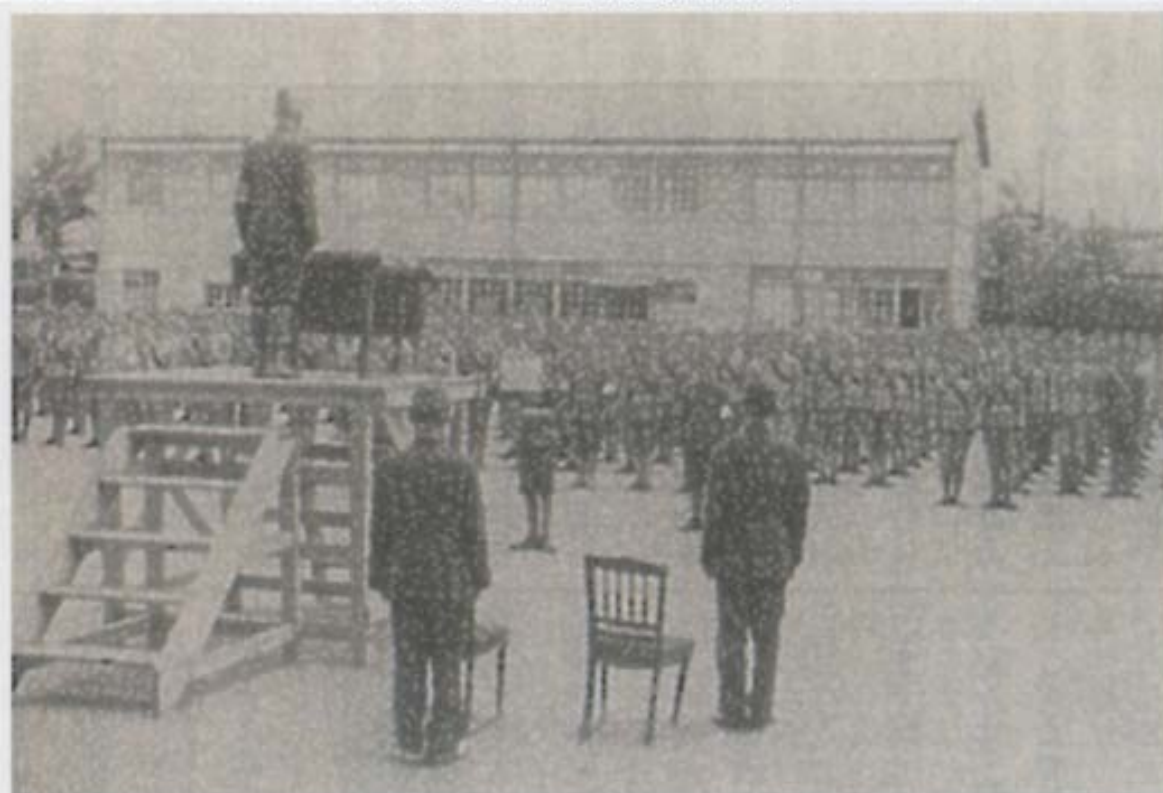
お役にとはありがたいことではないか。府当局の慎重な選定による結果で、むしろ光栄とすべきではないか」

「六月二十七日（火・雨後曇）先生から、学校を去るに当たってあとに悔いなきよう、各自、教室の隅々まで清潔にしておくよう指示あり。

先生の話によると半田地区は環境もよく、農産が盛んでよいところらしい。しかし、楽観は禁物で、あくまで学徒たるの本分を認識しなければいけない」

「六月三十日（金・晴）教練の間に止血法の実習あり。また、動員地での部屋別の編成など、1時間にわたっての諸注意が行われた。『学徒らしく行動し、しかも学徒ぶるなッ』である」

「七月一日（土・晴）出発を前にして最後の大掃除を済ます」



「七月二日(日・少雨)
出動のための身体検査
でレントゲン撮影。不
合格者が数人発見され
たらしい。午後に父兄
会あり」

「七月三日(月・晴)
午前八時登校、動員出
動式、挙行さる。『生
産増強に挺身せよ』
との校長の訓示あり。
府内務部長からも激励
の言葉。出動生徒代表
の宣誓、残留生徒代表
の激励を受けて堂々の
分列行進に移る。これ
が上級生の最後の行進
かと思うと出動、残留
生徒とも深く感激する
ところがあった」

「七月四日(火・曇少雨) 一日、ゆっ
くり休養しようと思ったが、明日の出発
を前にしての準備に忙殺される。午前
九時ごろ、警戒警報の発令をみる」

「七月五日(水・雨後晴) 朝七時、
家の者や隣組の人々に『頑張つてき
てくれ』と激励の言葉を浴びつ
家を出た。

級友の全員は東本願寺に集合す。
ラッパ吹奏とともに宮城を遥拝。さ
らに見送りの父兄の列に向けて全員
が無言の挙手の礼。その胸中には
『ぼくらは今より、授業を投げうち、
航空機の増産に精励せんがため出で
立つ。彼の地に行ったかぎりは全力
を出して増産に頑張り抜く覚悟であ
る。元気に行つてまいります』と誓
う。午前十時、父母や多数の父兄の
方々に激励の言葉をいただきつつ列
車は京都駅をあとにした」

寄付者芳名

(〇九年八月〜一〇年二月十五日まで)

5 前原英彦・5 木村英生・映画部O
B会・三三木下総一郎・三五松村篤之
介・匿名氏・17 澤田安之・5 参加者
有志・7 鈴木和子・4 尾崎恒・三八大
町義治・6 久保功・三四高橋誠・三三
野々村晃・三六外山司郎・18 河本充・
18 中村純三・三三勝馬登喜藏・7 国枝
治郎・18 前田幸一・18 真枝康子・18
田中春美・18 日渡惇二・5 江坂素一・
18 勝馬登・19 平野進・18 末沢昭一・18
鈴木照代・三三小畑修一・20 人羅賢司・
18 谷口昌男・三八渡邊稔・三八岡波泰造・
11 渡部隆夫・三四江端弘光・39 山口
延男・三八明石嘉蔵・5 江崎勤弥・26
大槻哲也・26 同窓生一同・8 中村長平・
18 宮澤裕子・佐々田好枝・26 池山一弥・
14 丹保重雄・2 森貞男・26 小西通博・
26 大沢重広・26 岡野直臣・26 松居康正
(漢数字は三中卒業回、アラビア数字は山城卒業
回、団体名と匿名氏は年度なし、実名氏は敬称略)

訂正とお詫び

◆本紙二号九頁十七行目

エリート教師が「腕を振るつ
た・・・」を「腕を揮(ふる)った」
に訂正します。

編集後記

◆創刊号に続き、今年も新卒業生に
プレゼントします。卒業式に間に
合ってホットしたところです。

◆それにしても最後の編集会議は無
茶苦茶盛り上がりしました。普段でも
楽しくやっています。議事も作業
も捗りません。受験勉強に似て、最
後の追い込みに賭けるところなど、
天晴れです。
(高林藤樹)

◆まずはじめに、多くの方からカン
パ戴きましたことをこの場をお借り
して篤くお礼申し上げます。

◆先輩にリードされながら本誌発行
にほんの少しですが役割を果たせた

こと、諸先輩方からお話を伺えたこ
と、楽しい編集会議など貴重な経験
をさせて戴きました。

◆これからも定期発行を続けていく
ために、原稿の提供と御寄付をお願
いします。
(松村多美男)

京三中・山城高同窓会誌

「双ヶ丘」第三号 (非売品)

二〇一〇年三月一日 発行

発行人 会長 森 貞男

編集長 5 回 高林 藤樹

次長 18 回 伊藤 禎彦

会計 26 回 松村多美男

幹事 19 回 中村美知子

幹事 26 回 竹内 順子

幹事 51 回 坪野優太郎

事務局 京都府立山城高等学校内

電話〇七五―四六三―八二六一

(京都市北区大將軍坂田町二九)